



殿さまの茶わん（11）

「これは、この国での有名な陶器師が、念に念を入れて造った殿さまのお茶わんでございます。できるだけ軽く、薄手に造りました。お気に召すか、いかがでございませうか。」と申しあげました。

殿さまは、茶わんを取りあげてごらんなさると、なるほど軽い、薄手の茶わんでございました。ちようと持っているかいがないか、気



殿さまの茶わん (12)

のつかないほどでございました。

「茶わんの善悪は、なんできめるのだ。」と、殿さまは申されました。

「すべて陶器は、軽い、薄手のをたつと貴たつとびます。茶わんの重い、厚手のは、まことに品のないものでございます。」と、役人はお答えしました。

殿さまは、黙ってうなずかれま





殿さまの茶わん (13)

した。そして、その日から、殿さまの食膳には、その茶わんが供えられたのであります。

殿さまは、忍耐強いお方でありましたから、苦しいこともけっして、口に出して申されませんでした。そして、一国をつかさどっていられる方でありましたから、すこしぐらいのことには驚きはなされませんでした。



殿さまの茶わん (14)

今度、新しく、薄手の茶わんが
上がってからというものは、三度
のお食事に殿さまは、いつも手を
焼くような熱さを、顔にも出され
ずに我慢をなされました。

「いい陶器というものは、こん
な苦しみを耐えなければ、愛玩が
できないものか。」と、殿さまは
疑われたこともあります。また、
あるときは、



殿さまの茶わん (15)

「いやそうでない。家来どもが、
毎日、俺に苦痛を忘れてはならな
いという、忠義の心から熱さを耐^{こら}
えさせるのであろう。」と思われ
たこともあります

「いや、そうでない。みんなが
俺を強いものだと信じているので、
こんなことは問題としないのだろ
う。」と思われたこともありまし
た。

つづく

